

ニューヨーク近代美術館 Museum of Modern Art (MOMA)



現在の MOMA 北側の彫刻庭園 美術館はこの庭を三方から囲む形となっている

最もニューヨークらしい美術館として、この近代美術館 MOMA が紹介されることが多い。収蔵されている絵画は、具象よりは抽象。古典よりは近現代。大体、それを収蔵している器(建物)まで、鉄とガラスでできた直方体を重ねたり伸ばしたりして造られているモダン建築だ。そのビルはミッドタウンの繁華な摩天楼に、見事に溶け込んでいる。私がこの美術館を紹介するのは、やや気が引ける。MOMA については、今が旬の作家、原田マハさんがスタッフとして働いていたこともあるし、彼女は『モダン』という書名のこの美術館を題材にした短編小説さえ出している。他にも大勢のモダンアートの専門家が言及する美術館だ。それでも敢えて、自身が訪問した時のエピソードは書いておこうと思う……。

ワイエスの代表作の一つを見に

私がこの美術館を訪ねたのは、今までのところ1回しかない。1992年の春だったと思う。夜間開館の時に出かけた。この頃も、MOMA はミッドタウンの53丁目にあって、現在ほどに大規模ではなかったけれど、四角な、中層階をもつオフィス然とした建物だった。アメリカ美術と言うと、どうしても現代風の抽象絵画やポップアートなどが目立つので、この美術館でも話題なのは、モネやセザンヌの作品より、ピカソやモンドリアン、マティスやウォーホルと言ったより現代的な作品なのだろう。そんな中で、あまり時間を取れなかったのも、他はそこそこに真っ直ぐに向かったのは、上階に展示してあった『クリスティーナの世界』というワイエス(Andrew Wyeth)の作品。具象絵画に違いないが、製作が1947年頃なのでまさに現代。古典的な要素は微塵(みじん)もない。さらに、何らかの思想性さえ帯びた、風景と

人間を主題にしたものだった。入場者の流れからは一步退いたギャラリーにその絵は飾ってあり、その意味でもモダンアートの主流からは離れ、一種、孤独を感じさせる雰囲気だった。

『クリスティーナの世界』は、ワイエスの代表作の一つだ。彼が描いた人間たちは決して多くはなく、それも夏を過ごすメイン州の漁村クーシング(Cushing)の人々と、秋から冬を越し春までを過ごしたペンシルヴェニア州の田園チャズ=フォード(Chadds Ford)での身近な人々しか被写体としていなかった。クリスティーナ=オルソン(Christina Olson)は、メインでのワイエス一家の借家の大家だったらしい。この作品は、際立って、見る者に不可思議な印象を与える。ご覧の通り、まずクリスティーナが後ろ姿で描かれている。さらに、彼女は草原を這うように移動している。何故と思うのではと思う。



クリスティーナの世界(Christina's World) アンドリュー・ワイエス

種明かしは、この女性が一種の筋萎縮症を患っていたこと。歳を重ねるにつれ、足が不自由になり、しかしそれでも、車椅子での生活を拒否し、近くでの用なら、こうして地を這って移動して済ましていたからなのだという。絵の向こう、遠くに描かれているのは、クリスティーナの自宅。歳月を経てくすんだ板壁が印象的だった。解釈は、絵を見る人それぞれ自由だが、ワイエス自身の解説によれば、老女クリスティーナが体の衰えをものともせず、強い意志をもって暮らしている様を示している、とされる。

ところで、彼女が暮らしていたクーシングとはどんな所なのか？その後の2014年夏、メイン州のロックランドにあるファーンズワース(Farnsworth)美術館を訪ね、その受付で行き方の地図をもらいこの漁村を訪ねた。とは言え、訪ね当てたクリスティーナが住んでいた家は、海岸からは離れた牧野の一画に、針葉樹の森に囲まれながら立っていた。この針葉樹さえなければ、絵の構図とそっくりな場所にも立つことができた。くすんだ板壁の家には、もはや

主なく、夏場はこうしてその外観を眺めるためにやって来るワイエス・ファンが辺りを徘徊しているだけだ。クリスティーナは同居していた弟と同じく、1960年に他界したと言う。

クリスティーナの絵を見て思うのは、画家ワイエスの描写手法と言うのか、一人の人間の姿を凝視し、まるでその内面にまで立ち入って描いたのでは、と想像できるところだ。彼は正面から、真横からと50代を迎えていたクリスティーナの肖像を何枚も残している。そしてこの絵では、今や国指定のランドマークとされているオルソン家の描写だが、本来建物右手には生えていたはずの灌木さえ捨象され、荒野の一軒家然とした姿で描かれている。しかもその前面には広場恐怖さえ感じるほどの草原の広がりがある。それに対面するクリスティーナの後ろ姿には、ひと際、寂寥感が漂っている……。何だか、心にしみるものを抱きながら、絵の前を去った。

ウォーホールのポップアート

これとは対照的に、近くのギャラリーに展示してあったのが、『キャンベルのスープ缶』。32個のキャンベルスープの缶を描いた(あるいは撮影した)アンディー=ウォーホール(Andy Warhol)のポップアートの代表作だ。被写体は、今や日本のスーパーにもごく普通に置いてある定番の商品である。ウォーホールがこれを作品にした60年代初頭、既にアメリカではスープ缶の代名詞にもなっていたこの商品のパッケージに、彼は何らかのインスピレーションを得たのだろう。それにしてもどこか笑いを誘う作品である。個人的にはクラムチャウダーのそれが良いと、カタログ写真を眺めるようにして思ってしまった。その作品の前には人だかりが出来ていた……。



キャンベルのスープ缶 (Campbell's Soup) アンディー=ウォーホール

さて、階下に降りて53丁目の通りに出ると、反対側に明かりが煌々とともるショールームのような建物があつた。オフィス街の夜で、辺りは漆黒の闇に覆われていた。そこにここだけが光輝くように明るく、華やかだった。MOMAには館内にミュージアム・ショップがあるが、

こちらはそのデザイン・ストアと言われるもの。モダンアートをそのまま実用の具としての食器や家具、装身具等に表現した物が、商品として置いてある。さらに言えば、世界中からグッド・デザインとして認定されたものも取り揃えていると言う。そもそも MOMA はその創立の当初から建築とデザインについての工芸部門を設けており、そうした流れの中でこのデザイン・ストアも誕生したそう。モダンアートの工芸と言うと、目に浮かぶのは、鮮やかな原色を多用した北欧デザインのそれを思い出す。黄色や赤色と言った強いインパクトの色彩を用いるものも多い。店内を冷やかした印象だと、その北欧デザインが一番を占めていたように思う。こうしたものが何より好きな私から見れば、この唯一無二のデザイン・ストアは貴重な存在と言えた。

日本にも展開する MOMA デザイン・ストア

ところが 21 世紀の現在、この MOMA デザイン・ストアは世界中に展開されつつある。それほど多くの支持を集めている。2020 年代の日本、東京にもすでに十店舗近くある。先日、原宿の表参道のビルに入るこのストアを訪ねてみた。同潤会アパート跡の表参道ヒルズの斜め向かいに位置するビルの 3 階に、収まっていた。私が欲しそうな物も多かったが、やはり顧客の中心は若者だ。ただ美しいだけでなく、ちょっとしたアイデアが光る商品も目立った。それで思い出したのだが、数年前にテレビで人気を博したドラマ『逃げるは恥だが役に立つ (逃げ恥)』の中で、このストア・グッズが幾つか、星野源演じる主人公の使う小道具として登場していたことに気がついた。



拡張された現在のニューヨーク市 MOMA デザイン・ストア

いかにもアメリカらしい、美の商業化である。しかし、それによって美しい工芸品が安価

に手に入れられ、身近に置いておけるというのは、悪いことではない。MOMA はある意味で、美の普遍化に貢献していると思う。

メモランダム こちらは、現在の情報です。

公式サイトは、www.moma.org となります。

住所は、11West, 53 street, New York, NY 53 丁目と 54 丁目の間を占める。

最寄り駅は、メトロ E-M 線の 5th avenue & 53street 駅。

53 番街を西に 100m。右手に入口が見える。

日～金は 10 時半～17 時半。土曜は 19 時まで。

入場料は、大人 25 ドル。学生は 18 ドル。65 歳以上のシニアも 18 ドル。16 歳以下の子供は無料。

コロナの今、この美術館も入場には時間指定を設けている。

収蔵品の増加で増改築を重ねた、MOMA の現在の建物は、日本人建築家谷口吉生氏が手掛けている。